

水は、今も昔も、私たちが生きていく上で切り離すことのできない、その基本となるものです。のどを潤すだけでなく、汚れを清めたり、農作物を育てたりなど、あらゆる用途に使われています。身近に水を得るために、縄文時代の集落は湧水地点や湖に近接する場所に立地することが多いですし、稲作文化とともに灌漑用水の技術が大陸から伝えられ、また集落の中には井戸が掘られました。

そのため、新鮮な水が得られる水源は穢してはならないものとして神聖視され、大切に守られてきました。それは湧水や井戸だけでなく、上流からの川の流れに対しても同じで、古くから人々は川に水の霊を感じ、これを祀ってきたのです。祀る場所としてとくに意識されたのが、川の流

れが大きく変化する場所です。その代表格が滝であり、和歌山県熊野那智大社がよく知られています。もうひとつ、川の流れが大きく変化する場所として意識されたのが、水源地や流れ出る場所、流れが合わさる場所、分かれる場所です。すなわち、源流部や合流部・分流部です。

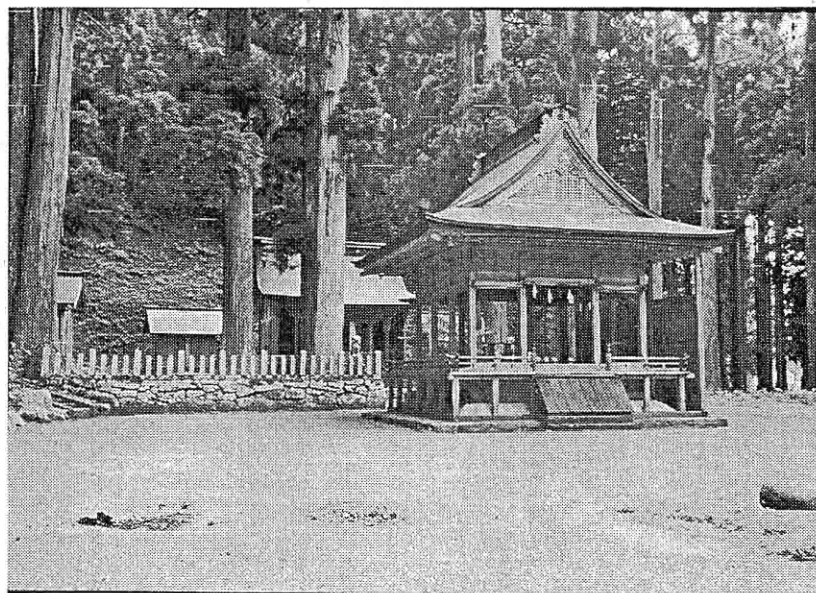
源流部から流れ出た水が本流となり、そこに支流が合流することで水量は増し、流れの勢いは強くなります。また、平野部に至って人工的に分けられた灌漑用水は、田畑を潤しながら流れ下っていき

ます。そのいづれもが、新たな水の命が生まれる神聖な場所と考えられ、水の霊が祀られることが少なくありません。その例として、滋賀県湖西地域を流れる安曇川を取り上げ、川の変化と神社の分布の関係をみてみましょう。

安曇川の源流は京都市左京区百井に求められ、大津市葛川を経て高島市朽木と同市今津町の境界までの朽木谷を北流する部分が上流部となります。朽木で、針畑川と北川が合流します。

北川源流の能家には山神社が、針畑川源流の生杉には式内社・大川神社に比定される大宮神社が、それぞれ祀られ

合流と分流の神



大宮神社（大川神社）

瀬用に分けられ、さら下っていきます。この流出部にあたります右岸の高島市安曇川町上古賀にも式内社・熊野神社が、左岸の同町長尾に若宮神社が、それぞれ祀られています。

さらに下って安曇川平野が大きく広がる下流部では、右岸の高島市新旭町安井川に式内社・大荒比古神社が、左岸の同市安曇川町常盤木に式内社・三重生神社が、それぞれ祀られています。

同じ高島市内を流れる鴨川や石田川でも、安曇川と同様に平野部への流出地点において、川を挟み古社が対面する状況を見ることができま

ています。ともに大規模な神社で、水源を見守るように祀られているようです。さらに、北川が合流して大きく東方へ屈曲する朽木野尻にも、山神社が祀られています。

この「式内社」は、延長5年（927年）に出された律令法の施行細則を集大成した法典『延喜式』の「神明式」

に記載されている官社（公營の神社）です。神社の古さと格式の高さを示す表現として使われ、全国で3132座を収載していますが、現在、わからなくなっているものも多

くあります。

さて、安曇川は中流部に至ると、大きな支流の合流は無くなりませんが、反対に水は灌漑協会 小島孝修

（財団法人滋賀県文化財保護

新しい水の命生まれる場所